

令和6年度 奈良市立大安寺幼稚園 研究実践概要

園長名 上野 真喜子

全園児数 15名

1. 研究主題 心豊かに、いきいきと活動する幼児を目指して
— ひと・もの・こととの関わりの中で —

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

校区に昔ながらの家が多く少子化が進んでいる。その影響で園児数も激減し、今年度から4・5歳児の複式クラスとなった。4歳児は3人中2人が外国籍の子で、言葉や文化の違いもあり周りの子もどのように関わればいいのか戸惑う様子も見られた。また5歳児は園での経験からいろいろな思いや考えがあるものの、上手く表現できない姿があった。

そのような現状を踏まえ、もっと自分を出してほしいという願いから職員間で検討し、一人一人が安心して園生活を送り、自分の思いを表現できることでいきいきと活動する姿につながるのではないかと考え、主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

ひと・もの・ことと興味や関心をもって関わる中で、自分の思ったことや感じたことを様々な場面で表現して心が豊かになり、いきいきと活動する姿につながっていくための保育者の援助や環境構成はどのようなものなのかを探る。

②研究の重点

- ・研究主題について職員相互の共通理解を図る。
- ・幼児の心が動く瞬間を捉え、その要因を明らかにする。
- ・心豊かに、いきいきと活動するための保育内容や環境構成及び援助について探る。

③活動の方法 ———— いきいきと活動している姿 保育者の援助 環境構成 保育者の意図

I. 4歳児 4月 『そっと手を繋いで…』

- ねらい ○初めての環境に慣れ安心して過ごす。
○保育者や友達と関わる楽しさや嬉しさを味わう。

入園当初保育者や5歳児が4歳児に登園準備や園生活の仕方を知らせたり、遊びに誘ったりする際、手を繋ぎスキンシップをとりながら関わっていた。また4歳児同士の関わりはほぼ見られていなかった。

体育講師を招いての初めての運動遊びの時間、体を動かすことに苦手さを感じている4歳児のA児

新しい環境で安心して過ごせるように、子どもの表情や日常生活での姿をよく見取り、一人一人に応じた言葉掛けや関わりがもてるようにする。

は出来ない気持ちと不安感から、泣きながら参加することなく保育者と一緒に活動を見ていた。活動が終わり一度は泣き止んでいたが、保育室に戻って排泄をし、上靴を履いている時に思い出したかのように、また泣き始めた A 児。そのとき同じ 4 歳児で外国籍の B 児がそっと A 児と手を繋ぎ、一緒に手洗い場まで行く姿が見られた。保育者は「B ちゃんありがとう。優しいね」「A ちゃん B ちゃんが心配して手を繋いでくれたんだね。良かったね」と、声を掛けた。A 児は泣き止み B 児と一緒に保育室まで戻っていった。その後 A 児から保育者に「B ちゃんが手を繋いでくれて嬉しかった」と笑顔になって話にくる姿が見られた。

保育者や 5 歳児、4 歳児と様々な人との関わりを通して友達と一緒に過ごす嬉しさや楽しさを味わってほしい。

友達と一緒にいることに嬉しさを感じられるような言葉を保育者が意図的に発したり、友達と楽しんで関わる時間の確保をしたりする。

<考察>

- ・言葉での関わりが難しい外国籍の B 児にとって、入園当初からの保育者や 5 歳児との“手を繋ぐ”という非言語コミュニケーションでのスキンシップは、安心できる関わりの一つになっていた。その事が泣いている A 児の姿を見て、自然と手を繋ぎに行くという行動に表れたのではないか。また、A 児にとって、保育者や 5 歳児とは違う、同じ 4 歳児の B 児が手を繋いでくれたという驚きや嬉しさを同時に感じ「嬉しかった」と保育者に伝えにきたのは、複式クラスならではの様々な人と関わるができる環境も影響していたのではないかと考える。言葉での関わりも大事であるが、非言語コミュニケーションでのスキンシップや様々な人との関わりは幼児にとって（個人差はあるが）安心できる手段や存在となるので大切にしていきたい。

II. 5 歳児 6 月 『じょうろ水道だ！』

- ねらい ○ 友達と色々なものを使って水遊びの面白さを存分に味わう。
○ 友達と思いや考えを伝え合い試行錯誤しながら遊びを進める。

砂場でヤカンとジョウロを組み合わせ、ジョウロの注ぎ口（蓮口はついていない）から水が出てくるか試し遊ぶ A 児 B 児。しかし中々出てこない様子に A 児「何でかな…。ヤカンの中の水をパンパンにしたらいんじゃない？」B 児「もっと水がいるね。小さいペットボトルじゃなくて大きい方を使ったら水がいっぱいになりそうだよ」など、考えを出し合いながら遊ぶ。ヤカンの水が増すにつれ、ジョウロに水が流れて注ぎ口に水が溜まってくるがまだ水が出てこない。B 児「もしかして…出口が上だからかな」とジョウロをくるっとひっくり返し、下に向けると「ジャー」と注ぎ口から水が出てきた。「うわー！出た！やったー！」「なんだか水がきれいになって出てくるよ」「水道みたいだ。ジョウロ水道だ！」と大喜び。手を洗ったり足を洗ったり、「きれいな水をためよう」とペットボトルにジョウロを使って水をためたりする。また、隣で山や川をつくっている他児に「ジョウロ水道一緒に使っていいよ」「きれいな水が出てくるんだよ」など、声を掛けながら遊んでいた。

色々なものに関わる中で、ものの仕組みや性質、特性について不思議に思ったり、発見したこと気付いたことを取り入れたりしながら遊びを進めていく楽しさを味わえるよう様々な形、大きさ水の量が入る道具を準備する。

保育者はさりげなく遊びの場の近くにおり、子ども達の声や姿を観察する。子ども達から共感の声があがったら共に喜んだり、一緒に不思議がったり面白がったりすることで遊びが展開していけるようにする。

友達と考えたり試したりして思いを出し合いながら新しい考えや刺激を受け合って自分達で遊びを創り出して進めていく楽しさを味わってほしい。

<考察>

- ・4 歳児から、ペットボトル、コップ、おたま、お椀、バケツ、ジョウロなど、色々なものを使って水遊びを楽しんでいた。5 歳児になり昨年度同様、複数のものを組み合わせる動きの変化を楽しむ姿が見られた。そこで保育者は様々な形、量、大きさが違う道具を

増やして環境を整えた。そのことで、ジョウロとヤカンを組み合わせ「どこから水が出るのか」と、ものの形に注目したり「ヤカンの水をパンパンにしよう」「大きいペットボトルの方が水が溜まりやすい」と、水の量に気付いたり「どうしたらジョウロの注ぎ口から水が出るのか」を友達と一緒に試行錯誤したりして今までの経験を活かして遊ぶ姿となった。仕組みや性質、特性が違う様々なものとの出会いが、子ども達の興味関心や探究心を刺激し、使って遊ぶことによって“こうしたい”という遊びへの意欲へと繋がった。また考えや思いの実現を友達と共有することで、より遊びの面白さを味わい、自分達で遊びを進めようとする姿となった。

Ⅲ. 4、5歳児 10月 『外国のお月さまってどんな模様？』

ねらい ○お月見について興味をもち、日本の伝統行事に親しむ。

○外国の月の模様について知り、世界への興味関心を広げる。

十五夜までの月の満ち欠けの周期が記載されているカレンダーを保育室に掲示した。子ども達は「今日の夜の月は半分だね」「昨日のお月様ちょっと太ってたよ」など月に興味をもち、毎日カレンダーを見ながら月の満ち欠けを楽しんでいる様子が見られていた。

お月見会当日、OHPを使って世界の月の見え方についてのシルエットクイズで遊んだ。「ウサギは日本だよ」「次はカニだ！ハサミがあるから分かった」と楽しんで参加する。保育者が「カニの模様に見える国はどこでしょう。ヒントは今年オリンピックがある国だよ」と言うと「パリだよ。お家の人から聞いたよ」と世界情勢を知っている幼児の声も聞かれていた。大きな木のシルエットには「木だ！すごく大きな木」保育者が「どこの国でしょう。ヒントはAちゃんの国だよ」と伝えると「○○○！」と即答していた。日本の月の模様とは違うウサギのシルエットを映し「Bちゃんの国の○○○はウサギが薬草で薬をつくっているんだって」と伝えると「なんで同じに見えないんだろうね」と不思議そうにしていた。保育者が世界地図を使ってパリやA児B児の国の場所を知らせると「Aちゃんの国はちょっと遠いから大きな木の形に見えるのかな」など感じたことを口々に話していた。保育室に戻り、シルエットクイズで出した月の模様を掲示しておく「これAちゃんの国だったやつ」「こっちはBちゃんだよ」など友達同士で興味をもって見ていた。

子ども達が興味をもっている月に関連付け、クイズ形式にすることでより楽しんで参加できるようにする。

月の模様のシルエットクイズで出したものと同じものを保育室に掲示したり、近くに月の図鑑を置いたりし、子ども達がいつでも好きなときに手に取って見たり調べたり出来るようにしておく。

お月見会という行事を通して、外国の月の模様の見え方について知り、世界について興味関心を広げることで、外国籍の子に親しみをもちながら子ども達なりの多文化共生への理解に繋がってほしい。

<考察>

- ・月の模様をOHPを用いてクイズ形式にしたことで子ども達はより楽しんで世界の国々の月の模様について知ることができた。また、オリンピックが開催される国を選んだり、クラスの友達の国を取り入れたことでより興味を示して聞く姿が見られた。その後、運動会で万国旗について触れる際も「Aちゃんの国って日本と似ているね」「Aちゃんの国とBちゃんの国をかくよ」と、子ども達から進んでかこうしたり、運動会後も好きな遊びの時間に国旗の図鑑を見ながら「これは日本」「これはAちゃんの国」と、かくことを楽しんでいた。外国籍の幼児達も友達がかいた自分の国の国旗を指さし「あれ！」「あっちも私の国！」と嬉しそうに保育者に伝えては何度も眺めていた。また世界地図や地球儀にもより興味を示すようになり「ここが日本だよ」「Aちゃんの国って広いね」など以前にも増して調べたり世界について自分達から知ろうとしたりする姿が増えてきている。
- ・行事前、事前外国籍の幼児の保護者に月の見え方について質問し、実際につくったOHP教材を見せたり、お月見会の子ども達の様子を写真で見せたりした。自国の話を生き生きと教えてくれたり喜んで微笑みながら聞いてくれたりし、保護者とも自国の話をするこ

とができ、距離が縮まる良い機会となった。

IV. 5歳児 12月頃 『ケンケンでタッチにしよう』

- ねらい ○友達とルールを確認しながら相談や協力して体を動かすことを楽しむ。
○異年齢児のことを考えながら遊びを進めようとする。

5歳児が鬼ごっこで遊んでいる様子を見て、4歳児が「あれ(鬼ごっこ)一緒にしたい」と保育者に話しにくる。保育者と一緒に「入れて」と伝えると5歳児は「いいよ。今、鬼の人いっぱいだから逃げて」と伝える。4歳児は初めての参加だったが、ルールをわかっている様子だったので保育者は一端鬼ごっこの遊びから離れ、違う遊びの場に向かった。再び鬼ごっこの方に目をやると、ケンケンで4歳児を追いかけしている5歳児の姿が見えた。近くにいた鬼役の5歳児A児に「どうしてケンケンしているの?」と聞くと「Bちゃんが4歳さんだからケンケンでタッチすることにしようって言った。それで鬼の人みんなでいいよって決めたんだ」と答える。「へー、そうなんだ。でもどうしてケンケンにしようってなったの?」と再度保育者が聞くと「だって4歳さんすぐタッチされちゃったら可哀想だから!」と言い、友達を追いかけ走っていった。5歳児のケンケン鬼から笑顔で逃げようとする4歳児の姿が見られた。片付けになると「面白かった。明日もしたい」と、4歳児が満面の笑みで保育者に伝えていた。

鬼ごっこで遊んでいる幼児と他の遊びの幼児がぶつかることのないよう様子に目を配ったり、鬼ごっこをする範囲に玩具や道具などが落ちていたら拾ったりするなど安全面に気を付けながら環境を整える。

ルールの共通認識ができていなかったり、遊びの場が広範囲に渡り安全面などで危なかったりしたときは、全体に声を掛け、遊んでいる皆で再度確認し合えるよう話し合う機会をもてるようにする。

4歳児や友達の様子を考慮しながらみんなが楽しめるルールや逃げる役、鬼役で協力して自分達なりの遊び方を考えていってほしい。

<考察>

- 4歳児が鬼ごっこに初めて入ったことで、5歳児なりに「4歳児さんにはケンケンでタッチしよう」という新しいルールを考え、同じ鬼役の友達に知らせ共有していった。他の5歳児の幼児も新しいルールを自然と受け入れてケンケンで追いかけていた。生活を共に過ごす中で4歳児との関わりを通して年下の子を思いやる温かい気持ちが5歳児に自然と育まれていることが分かった。5歳児が配慮したおかげで4歳児は「面白かった。またしたい」という気持ちに繋がり、大勢でルールのある遊びの楽しさを味わうことができた。

5. 研究の成果

- 園生活の中で友達や保育者と関わる温かみを体感することで、安心して過ごすことができる。それが土台にあることで、「嬉しい」「楽しい」「もっとしたい」「こうやりたい」という気持ちが生まれ、意欲につながっていくと思われる。
- 幼児の興味関心、発達段階に沿ったものとの出会いで知的好奇心が刺激され一段深い興味関心へと変わっていく。その為には保育者が日々の幼児の姿をよく見取り、幼児の思いの半歩先を予測し環境を準備することで探究心、創造力、試行錯誤するプロセスを引き出すことができる。そしてそれを一緒に楽しみ考え、思いを伝い合える友達や保育者がいることで、いきいきと活動する姿につながる事がわかった。
- 保育者はクラスの現状や幼児一人一人の実態を把握しながら幼児の声や小さな気付きを大切に、柔軟な発想力思考力で幼児が様々なことと出会えるよう保育内容を計画することが大切であると感じた。そして幼児が多様な経験を重ね、ひと・もの・ことと関わる中で様々な思いや感じたことを言葉や行動で表現し心豊かになっていくのだと思った。

6. 今後の課題

- 今年度の研究で改めてわかった「ひと・もの・こと」との関わり大切さを職員間で共通理解し、幼児の心が動いた瞬間を捉え、気づきや興味関心を見取る力を養っていききたい。
- 園児数が減る中で、多様な経験ができるように保育内容を計画し実施できるように努めていきたい。